九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

The Music One Participates In : Analysis of participatory musical practice at the beginning of 21st century

城, 一裕

https://doi.org/10.15017/1500449

出版情報：九州大学, 2014, 博士（芸術工学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名	城　一裕
論　文　名	The Music One Participates In: Analysis of participatory musical practice at the beginning of 21st century （参加する音楽-２１世紀初頭における参加型の音楽実践の分析-）
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　中村　滋延 副　査　　九州大学　　教授　　富松　潔 副　査　　九州大学　　教授　　矢向　正人 副　査　　多摩美術大学　教授　　久保田　晃弘

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論は，21 世紀の初頭においてテクノロジーの発達によって従来から変わりつつある音楽の姿を,「参加する音楽」という概念の下，執筆者が行ってきた数々の音楽実践の分析を通して明らかにしたものである.第 1 章では,「参加する音楽」が音の聴取と生成とに等しく関わる音楽的な実践であることを示す.音楽と人々の関わり方は時代によって大きく変遷してきたが,20 世紀，特に後半は複製技術の発達によって「作曲・演奏すること」と「聴くこと」がはっきり分かれていった“非参加型"の音楽の時代である.執筆者は参加型の音楽実践について論じる際の課題を，Lessig の Read/Write 文化，Attali の作曲の系， Small のミュージッキング、(Musicking)，Barthes の聴く音楽と演奏する音楽に関する議論，三輪の録楽への参照を踏まえ，以下の 3 つに設定する.

1.パフォーマンスの場における演奏者と聴衆との境界の揺動.

2.音楽的参加の概念の do-it-yourself(DIY) に関わるワークショップを通じた拡張.

3.現在の技術的環境のもとでの複製の役割の再考.

なお,「参加する音楽」とは 21 世紀に立ち現れる音楽の姿すべてを包括的に捉える概念ではなく，特徴的ではあるが，あくまでもその一部であることを執筆者は論文中に断っている.第 2 章では，社会科学と認知科学からヒューマン・コンピュータ・インタラクション(HCI)，さらに現代美術に至るまでの様々な分野における参加に関する言説を紹介し，その意味を吟味する.論文では，参加における人々の役割とその関係性を,「参加する音楽」という概念の中心に位置するものとして捉えている.特に，音楽的な実践におけるそれら役割と関係性を論じる上で， Arnstein の参加のはしご，Lave and Wenger 実践のコミュニティ, Boden の大きな創造(歴史的な創造)と小さな創造(個人的な創造)，Csikszentmihalyi のフロー，Bishop や Foster の参加への懐疑などに関する議論を参照している.第 3 章では，一つ目の課題への試みとして執筆者による The SINE WAVE ORHESTRA(SWO)の実践を示している.この実践においては，ステージや指揮者という中央の権威を排除することにより演奏者と聴衆との境界を揺らしている. SWO の各作品ではサイン波を発生させる機器(=道具)が楽器として用いられているが，様々な時間的，物理的，環境的，手続き的な条件の下, 道具は同一ではない.この道具の違いが, 参加者に対して多様な音楽体験をもたらしている.道具と楽器の区別，既存の音楽実践への参照を踏まえ，この章では SWO の 9 作品を事例として示し，道具の楽器としての要素を詳細に分析し図示している.この分析に続き，参加者の音楽的な参加の様式の違いを 3 つの視点(個と全体，動き，時間と空間)から示すと共に，SWO の実践に対する批評家のレビ、ューを吟味している.これらの提示を通じ，人々が参加型の音楽実践に加わる際の違いに, 作品の各要素がどのように影響するかが検討されている.第 4 章では, Chiptune Marching Band や Generative Music Workshop，他の実践を参照し，二つ目の課題を考察している.前者は手づく

りの電子楽器とそれを用いた戸外でのグループパフォーマンスである.ワークショップという語の位置づけを複数の論点から吟味するとともに, 執筆者自らの実践を中心とした DIY の活動におけるファシリテータと参加者の関係性への考察を通じて，参加型の音楽実践についてその位置づけを明らかにしている.第 5 章で、は三つ目の課題に対し，予め吹き込むべき音響のないレコードの制作実践をその一例と位置づけている.これまでの録音技術とは対照的に，この実践では本来の音というもの無しに人々が各々の音を作り出す点に「参加する音楽」を見ることが出来る.ここではさらにその技術的な詳細と共に美学的な影響を歴史的に位置づけている.最終章では，執筆者自らの実践の分析結果を示し，立ち現われつつある音楽すなわち「参加する音楽」の姿を分析的に整理している.その結果、本論文の最初に掲げた 3 つの課題の本質を明らかにした.同時に、この分析結果から、本論文で取り上げたそれぞれの実践が 21 世紀初頭におけるパフォーマンス，ワークショップ，複製，それぞれの意味を考えなおす土台となることを示した.

以上のとおり本研究は 21 世紀初頭に立ち現れた「参加する音楽」という概念を，執筆者自身による音楽実践と的確で広汎な文献に基づく論点整理とによって明らかにしたもので，きわめて独創的かつ芸術工学的である.加えて研究内容を国際的にアピールするために英語で書いた意欲も高く評価することが出来る.よって，本論文が博士(芸術工学)の学位に値するものであることを，本調査委員会は認めた.